

うれしきかな末法流布に生まれあへる我等、かなしきかな今度此の経を信ぜざる人々。
抑^{そもそも} 人界に生を受くるもの誰か無常^{まぬか}を免れん。さあらんに取っては何ぞ後世のつとめ
をいたさざらんや。情^{つらつら} 世間の体を観ずれば、人皆口には此の経を信じ、手には経巻を
にぎるといへども、経の心にそむく間、悪道を免れ難し。譬へば人に皆五臓あり。一臓
も損ずれば其の臓より病出来して余の臓を破り、終に命を失ふが如し。爰を以て伝教大
師は「法華経を讚すと雖も還って法華の心を死す^{こころ}」等云云。文の心は法華経を持ち読み
奉り讚むれども、法華の心に背きぬれば、還って釈尊十方の諸仏を殺すに成りぬと申す
意なり。縦ひ世間の悪業衆罪は須弥の如くなれども、此の経にあひ奉りぬれば、衆罪は
霜露^{そうろ}の如くに法華経の日輪に値ひ奉りて消ゆべし。然れども此の経の十四謗法の中に、
一も二もをかし^犯ぬれば其の罪消えがたし。所以^{いかに}は何、一大三千界のあらゆる有情を殺
したりとも、争でか一仏を殺す罪に及ばんや。法華の心に背きぬれば、十方の仏の命を
失ふ罪なり。此のをきてに背くを謗法の者とは申すなり。地獄おそるべし、炎を以て家
とす。餓鬼悲しむべし、飢渴^{け かつ}にうへて子を食らふ。修羅は鬪諍なり。畜生は残害とて互
ひに殺しあふ。紅蓮地獄と申すはくれなゐのはちすとよむ。其の故は余りに寒につめら
れてこぞむ間、せなかわれて肉の出でたるが紅の蓮^{はちす}に似たるなり。況んや大紅蓮をや。
かゝる悪所にゆけば、王位將軍も物ならず、獄卒の呵責^{かしゃく}にあへる姿は猿をまはすに異
ならず。此の時は争でか名聞名利・我慢偏執有るべきや。

思^{おぼ}し食^めすべし、法華経をしれる僧を不思議の志にて一度も供養しなば、悪道に行くべ
からず。何に況んや、十度・二十度、乃至五年・十年・一期^{ごしやう}生の間供養せる功德をば、
仏の智慧にても知りがたし。此の経の行者を一度供養する功德は、釈迦仏を直ちに八十
億劫が間、無量の宝を尽くして供養せる功德に百千万億勝れたりと仏は説かせ給ひて候。
此の経^値にあひ奉りぬれば悦び身に余り、左右の眼に涙浮かびて釈尊の御恩報じ尽くしが
たし。かやうに此の山まで度々の御供養は、法華経並びに釈迦尊の御恩を報じ給ふに成
るべく候。彌^{いよいよ}はげませ給ふべし、懈^{おこた}ることなかれ。皆人の此の経を信じ始むる時は
信心有る様に見え候が、中程は信心もよはく、僧をも恭敬^{くぎやう}せず、供養をもなさず、自
慢して悪見をなす。これ恐るべし、恐るべし。始めより終はりまで彌信心をいたすべし。
さなくして後悔やあらんざらん。譬へば鎌倉より京へは十二日の道なり。それを十一日
余り歩^{あゆ}みをはこびて、今日に成りて歩みをさしをきては、何として都の月をば詠め候
べき。何としても此の経の心をしれる僧に近づき、彌^{いよいよ}法の道理を聴聞して信心の歩み
を運ぶべし。

噫^{ああ}、過ぎにし方の程なきを以て知んぬ、我等が命今幾程もなき事を。春の朝^{あした}に花を
ながめし時、ともなひ遊びし人は、花と共に無常の嵐に散りはてゝ、名のみ残りて其の

人はなし。花は散りぬといへども又こん春もひら発くべし。されども消えにし人は亦またいかならん世にか来たるべき。秋の暮れに月を詠めし時、戯れむつびし人も、月と共に有為の雲に入りて後、面影ばかり身にそひて物いふことなし。月は西山に入るといへども亦こん秋も詠むべし。然れどもかくれし人は今いづくにか住みぬらん、おぼつかなし。無常の虎のなく音は耳にちかづくといへども聞いて驚くことなし。屠所の羊は今幾日か無常の道を歩みなん。雪山の寒苦鳥は寒苦にせめられて、夜明けなば栖つくらんと鳴くといへども、日出でぬれば朝日のあたゝかなるに眠り忘れて、又栖をつくらずして一生虚しく鳴くことをう。一切衆生も亦復是くの如し。地獄に墮ちて炎にむせぶ時は、願はくは今度人間に生まれて諸事をさしお聞いて三宝を供養し、後世菩提をたすからんと願へども、たまたま人間に来たる時は、名聞名利の風はげしく、仏道修行の灯は消えやすし。無益の事には財宝をつくすにおしからず。仏法僧にすこしの供養をなすには是をものうく思ふ事、これたゞごとにあらず、地獄の使ひのきをふものなり。寸善尺魔と申すは是なり。

其上此の国は謗法の土なれば、守護の善神法味にうへて社をすて天に上り給へば、悪鬼入りかはりて多くの人を導く。仏陀は化をやめて寂光土へ帰り給へば、堂塔寺社は徒に魔縁の栖と成りぬ。国の費え民の歎きにて、いらかを並べたる計りなり。是私の言にあらず経文にこれあり、習ふべし。諸仏も諸神も謗法の供養をば全く請け取り給はず、況んや人間としてこれをうくべきや。春日大明神の御託宣に云はく、飯に銅の炎をば食すとも心穢れたる人の物をうけじ。座に銅の焰には坐すとも、心汚れたる人の家にはいたらじ。草の廊、萱の軒にはいたるべしと云へり。縦令千日のしめを引くとも不信の所には至らじ。重服深厚の家なりとも有信の所には至るべし云云。是くの如く善神は此の謗法の国をばなげきて天に上らせ給ひて候。心けがれたると申すは法華経を持たざる人の事なり。此の経の五の巻に見えたり。謗法の供養をば銅の焰とこそおほせられたれ。神だにも是くの如し、況んや我等凡夫としてほむらをば食すべしや。人の子として我が親を殺したらんものゝ、我に物をえさせんに是を取るべきや。いかなる智者聖人も無間地獄を遁るべからず。又それにも近づくべからず。与同罪恐るべし恐るべし。

釈尊は一切の諸仏・一切の諸神・人天大会・一切衆生の父なり、主なり、師なり。此の釈尊を殺したらんに、争でか諸天善神等うれしく思し食すべき。今此の国の一切の諸人は皆釈尊の御敵なり。在家の俗男俗女等よりも邪智心の法師ばらは殊の外の御敵なり。智慧に於ても正智あり邪智あり。智慧ありとも其の邪義には随ふべからず。貴僧高僧には依るべからず。賤しき者なりとも、此の経の謂れを知りたらんものをば生身の如来のごとくに礼拝供養すべし。是経文なり。されば伝教大師は無智破戒の男女等も此の経を信ぜん者は、小乗二百五十戒の僧の上の座席に居えよ、末座にすべからず。況んや大乘の此の経の僧をやとあそばされたり。今生身の如来の如くみえたる極楽寺の良観房よりも、此の経を信じたる男女は座席を高く居えよとこそ候へ。彼の二百五十戒の良観房も、日蓮に会ひぬれば腹をたて眼をいからず。是たゞごとにはあらず。智者の身に魔の

入りか代はればなり。譬へば本性よき人なれども、酒に酔ひぬればあしき心出来し、人の為にあしきが如し。仏は法華以前の迦葉・舍利弗・目連等をば是を供養せん者は三惡道に墮つべし。彼等が心は犬・野干の心には劣れりと説き給ひて候なり。彼の四大声聞等は、二百五十戒を持つことは金剛の如し。三千の威儀具足する事は十五夜の月の如くなりしかども、法華經を持たざる時は是くの如く仰せられたり。何に況んや、それに劣れる今時の者共をや。建長寺・円覚寺の僧共の作法戒文を破る事は大山の頽れたるが如く、威儀ほうらつの放埒ごせなることは猿に似たり。是を供養して後世を助からんと思ふは、はかなしはかなし。

守護の善神此の国を捨つる事疑ひあることなし。昔釈尊の御前にして諸天・善神・菩薩・声聞、異口同音に誓ひをたてさせ給ひて、若し法華經の御敵の国あらば、或は六月に霜しも霰あられと成りて国を飢饉せさせんと申し、或は小虫と成りて五穀食をはみ失はんと申し、或は早魃かんぼつをなさん、或は大水と成りて田園をながさんと申し、或は大風と成りて人民を吹き殺さんと申し、或は惡鬼と成りてなやまさんと面々に申させ給ひき。今の八幡大菩薩も其の座におはせしなり。争でか靈山の起請きしょうの破るゝをおそれ給はざらん。起請を破らせ給はゞ無間地獄は疑ひなき者なり。恐れ給ふべし恐れ給ふべし。

今までは正しく仏の御使ひ出世して此の經を弘めず、国主もあながちに御敵にはならせ給はず、但いづれも貴しとのみ思ふ計りなり。今某それがし、仏の御使ひとして此の經を弘むるに依りて、上一人より下万民に至るまで皆謗法と成り畢んぬ。今までは此の国の者ども法華經の御敵にはなさじと、一子のあやにくの如く捨てかねておはせども、靈山の起請のおそろしさに社を焼き払ひて天に上らせ給ひぬ。さはあれども身命惜をおしまぬ法華經の行者あれば其の頭には住むべし。天照大神・八幡大菩薩天に上らせ給はゞ、其の余の諸神争でか社に留まるべき。縦たとひ捨てじと思し食すとも、靈山のやくそくのまゝに某かしゃく呵責し奉らば、一日もやはかおはずべき。譬へば盜人の候に、知れぬ時はかしこやここに住み候へども、能く案内知りたる者の、是こそ盜人よとのゝしりどめけば、おもはぬ外すみかに栖すを去るが如く、某にさゝへられて社をば捨て給ふ。然るに此の国思ひの外に惡鬼神の住家となれり。哀れなり哀れなり。

又一代聖教を弘むる人は多くおはせども、是程の大事の法門をば伝教・天台もいまだ仰せられず。其れも道理なり。末法の始の五百年に上行菩薩の出世あて弘め給ふべき法門なるが故なり。相構へて、いかにしても此の度此の經を能く信じて、命終の時千仏の迎へに預かり、靈山浄土に走りまいり自受法樂すべし。信心弱くして成仏ののびん時、某をうらみさせ給ふな。譬へば病者に良藥ろうやくを与ふるに、毒を好んでくひぬれば其の病愈えがたき時、我がとがとは思はず、還つて醫師を恨むるが如くなるべし。

此の經の信心と申すは、少しも私なく經文の如くに人の言を用ひず、法華一部に背く事無ければ仏に成り候ぞ。仏に成り候事は別の様は候はず、南無妙法蓮華經と他事なく唱へ申して候へば、天然と三十二相八十種好を備ふるなり。如我等無異と申して釈尊程

の仏にやすやすと成り候なり。譬へば鳥の卵は始めは水なり、其の水の中より誰かなすともなけれども、^{くちばし} 嘴 よ目よと^{かざ} 齧り出で来て虚空にかけけるが如し。我等も無明の卵にしてあさましき身なれども、南無妙法蓮華經の唱への母にあたゝめられまいらせて、三十二相の^{よろいげ お} 齧出でて八十種好の^こ 鎧 毛生ひそろひて実相真如の虚空にかけけるべし。爰を以て經に云はく「一切衆生は無明の卵に処して智慧の口ばしなし。仏母の鳥は分段同居の^{ふるす} 古栖に返りて、無明の卵をたゝき破りて一切衆生の鳥を^{巢立} すだてて、法性真如の大虚にとばしむ」と説けり取意。

^{うげむしん} 有解無信とて法門を^{さと} ば解りて信心なき者は更に成仏すべからず。有信無解とて^げ 解はなくとも信心あるものは成仏すべし。皆此の經の意なり、私の言にはあらず。されば二の卷には「信を以て入ることを得、己が智分に非ず」とて、智慧第一の舍利弗も但此の經を受け持ち信心強盛にして仏になれり。己が智慧にて仏にならずと説き給へり。舍利弗だにも智慧にては仏にならず。況んや我等衆生少分の法門を心得たりとも、信心なくば仏にならんことおぼつかなし。末代の衆生は法門を少分をこゝろえ、僧をあなづり、法を^忽 いるかせにして悪道におつべしと説き給へり。法をこゝろえたるしるしには、僧を敬ひ、法をあがめ、仏を供養すべし。今は仏ましまさず、解悟の智識を仏と敬ふべし、争でか徳分なからんや。後世を願はん者は名利名聞を捨てゝ、何に^{いや} 賤しき者なりとも法華經を説かん僧を生身の如来の如くに敬ふべし。是正しく經文なり。

今時の禅宗は大段、仁・義・礼・智・信の五常に背けり。有智の高徳をおそれ、老いたるを敬ひ、幼きを愛するは内外典の法なり。然るを彼の僧家の者を見れば、昨日今日まで^{でんぶやじん} 田夫野人にして黒白を知らざる者も、^{褐色} かつちんの直綴をだにも^き 著つれば、うち慢じて天台真言の有智高徳の人をあなづり、礼をもせず其の上に居らんと思ふなり。是傍若^{ぼうじゃく} 無人にして畜生に劣れり。^こ 爰を以て伝教大師の御釈に云はく、^{せんだつ} 川瀬祭魚のこゝろざし、^{りんう} 林鳥父祖の食を通ず、^{きゅうごうさんし} 鳩鴿三枝の礼あり、^{こうがんつら} 行雁連を乱らず、^{みだ} 恙羊 踞りて乳を飲む。賤しき畜生すら礼を知ること是くの如し、何ぞ人倫に於て其の礼なからんやとあそばされたり取意。彼等が法門に迷へる事道理なり。人倫にしてだにも知らず、是天魔波旬のふるまひにあらずや。

是等の法門を能く能く明らめて、一部八卷廿八品を頭にいたゝき^{おこた} 懈らず行なひ給へ。又某を恋しくおはせん時は日々に日を拝ませ給へ、某は日に一度天の日に影をうつす者にて候。此の僧によませまひらせて聴聞あるべし。此の僧を解悟の智識と^{たの} 憑み給ひてつねに法門御たづね候べし。聞かずんば争でか迷闇の雲を払はん。足なくして争でか千里の道を行かんや。返す返す此の書をつねによませて御聴聞あるべし。事々面の^つ 次いでを期し候間委細には申し述べず候。穴賢穴賢。

弘安三年二月 日
新 池 殿

日 蓮 花 押